会　報

第７号

談笑されるベーカー先生（懇親会にて）

京都大学地理学談話会

１９９６

寄稿

大学改革と地理学教室

石　原　　潤（昭和37年卒）

本年４月１日付けで、名古屋大学文学部より、京都大学文学部（公式には大学院文学研究科）に転任いたしました。３０年ぶりの京大の変わり様に感慨に浸る間もなく、水津先生のご逝去と言う予期せぬ出来事があり、悲しくも慌ただしいスタートとなりました。新任の所感を述べよとの編集者のご注文ですので、私自身いささか関わってまいりました現在進行中の大学改革と、それとの関連における地理学教室のあり方について、所感を述べさせていただきます。

今度の大学改革は、戦後の新制大学発足時以来の大改革であると言われています。新制への移行が全国一律で瞬時に行われたのに対して、今回の改革は大学毎に違ったかたちとスピードで行われていますが、数年たって全国を見渡すと、なるほど大改革であったなと実感されるのではないかと思われます。改革は、カリキュラムの大綱化（教養課程の廃止と全学共通科目化）から始まり、教養部の解体／再編成へ、さらに学部の再編成（大講座化や学科改組）を経て、大学院の拡充（大学院重点化や独立専攻の新設）へと進んでいます。

教養課程の改革では、多くの大学で「地理学」と銘うった授業科目が無くなりました（幸い京大では残されましたが）。このことは、長期的には影響が大きいと考えています。

また旧教養部の地理学担当教官の多くが、新たな学際的な学科・コースを担当するようになりました。そこでは各教官の力量とアイデンテイテイーが問われることになりますが、このような学科・コースの発足は、本家の地理学教室にとっても新たな競争相手の出現を意味します。

学部の再編成でも、大講座化に際して、いくつかの大学で「地理学」の名が無くなったと聞いていますが、少なくとも旧７大学など基幹的な国立大学ではこれを残そうと、連絡を取りあいながら頑張った結果、東北大理、東大理、名大文、京大文、広大文、九大文の各学部には「地理学」の名が入った大講座が維持されました。その上、阪大文には「人文地理学」大講座が、北大文にも「地域システム」大講座が成立したのですから、これは大成功であったと言えるでしょう。

大学院の再編成に際しては、一般に「専攻」の規模が拡大しますので、地理学だけで「専攻」を維持するのは困難で、各大学では「専攻」の下の「専修」や「専門」のかたちで、実質的に専攻を維持しようとしています（京大でも同じです）。問題はむしろ、重点化に際して、学生定員が増加し、しかも定員の充足を文部省から要求されることで、全国的に特に修士課程学生の急増が目立ちます。また、文科系でも課程博士を恒常的に出すこと、しかもなるべく３年間の課程内で出すことが要求されつつあります。このことは、学生にとっても大変ですが、教官にとっても大きな負担となるでしょう。

これらの改革を行うと、確かに予算が増え、設備も改善される可能性が高まりますが、そこはアメとムチ、「自己点検」や「他者評価」が待ち構えています。英米のように、大学教官の任期制の導入や、全国の学科間の順位評価も、近い将来ありうるのではないかと危惧しております。

このような流れの中で、地理学教室の近

未来を窺うと、多くの新しい事態が予想されます。特に大学院に関しては変化が大きく、各大学は優秀な学生の獲得にしのぎを削ることになるでしょう。急増する修士課程終了者は、公務員・コンサルタント・高校教員などに新たな進路を見いだすことが必要になるでしょう。博士課程終了者は学位を取ることが通常化し、研究職を手に入れるためには激しい競争に打ち勝つ必要があるでしょう。

かつて永井文相は、日本の大学の構成を「富士山型」から「八ヶ岳型」にするのが理想だと語りましたが、私は、こと地理学界に関する限り、もう２０年ほど前から「八ヶ岳型」が実現していると見ています。昨年のこの欄で石川義孝氏が、学会誌への投稿数を基準に院生諸君の奮起を促されましたが、私は少し違ったデータを紹介したいと思います。昨年の文部省科学研究費人文地理学分野の採択者数（研究代表者数）を出身大学院別に集計しますと（若干の不明者がありますが）、１位広大、２位名大、３位筑波大、４位京大の順となります。京大はある程度健闘しているように見えますが、それはむしろ中年以上の出身者の貢献によるのであって、３７歳以下の若手研究者が毎年出願でき採択率も高い「奨励研究Ａ」に限ると、京大出身者の採択数はゼロであって、広大、名大、筑波大、都立大、東北大、阪大に遅れをとっています。

しかしながら、４月以来、京大の現大学院生と接して、彼らが高い水準の研究活動を目指し努力していること、最近は学会誌にどんどん投稿していることを知り、感銘を受けております。上記のような状態は、近い将来解消されるものと期待しております。

講演会の報告

1995年11月10日に文学部博物館において文学部特別講演としてアラン・ベーカー先生に，談話会秋期講演会として小長谷一之先生に講演していただきました。

歴史地理学の歴史と地理について

アラン・ベーカー博士
(ケンブリッジ大学)

今からちょうど70年前，「全ての地理学は歴史地理学である」とロードウェル・ジョーンズは，彼の教授就任記念講義で宣言しました。それから20年後，デルウェント・ウィットルセーは，「地理学のいかなる言明も，時間という要素に配慮することがなければ，不完全なものである」と述べています。その少し後，ヘンリー・クリフォード・ダービーは歴史と地理の間に線を引くことはできないと考えました。

地理学の研究は，これまで常に，歴史というものに裏付けられた研究でありましたし，これからもそうであらねばなりません。現代を扱う地理学も過去を扱う地理学も，共に地理的変化という問題に取り組んでいます。地理学の歴史を通じて，これら２つの地理学の間の論理的な連関が，根本的な結合力となってきました。

２つの地理学の関心は時間や空間ごとに大きく異なっています。私はこの講演において，歴史地理学の中に存在する幾つかの相違点，それは歴史的・地理的なものでありますが，これについて考えてみたいと思います。そして，同時にその多様性の中にみられる根本的な共通性についても強調しておきたいと思います。

過去についての地理学的研究である近代

西欧の歴史地理学は，1920－30年代に成立しました。そして，60年代半ばには，過去の地理を再構成するだけではなく地理的な変化を検討する確固たる研究分野として，成熟の時を迎えました。

歴史地理学における「ダービー的な伝統」は，資料に基づいた経験論的で，方法論的にはプラグマティックな学風をもっていました。しかし，70年代初頭以降，現代を対象とする地理学や社会科学一般における発展によって，徐々に疑問を呈されるようになってきました。

過去の地理を検討する歴史地理学は，現在を対象とする地理学研究と関心の広がりを共有しています。歴史地理学は地理学の伝統的・「中心的」なテーマである地域や場所，エリアについての関心だけではなく，現代の地理学において「周辺的」なテーマであるエコロジカルな視点や立地の問題，景観の概念も取り扱います。

歴史地理学という学問分野に属する多様性に富んだ様々な研究は，一つの共通した特徴を共有しています。それは，たとえ，研究のありようが時間的・空間的に異なっているとしても，彼らの地理的関心は，現在ではなく，過去の或る時間や時代に注がれている点であります。そして，この点に，歴史地理学の本質が存在するのです。

歴史地理学研究には，時間的な変化もありましたし，場所による違いもあります。しかし，学問分野の核心部分で，幾つかの基本的な連続性や類似性があるのです。それゆえ，歴史地理学創立時のアイデアでも今日，問題を考える際に役立つと思われます。

さて，今日の歴史地理学の一つの特徴として，歴史地理学の研究者間の交流の活発化と，その結果としての歴史地理学研究の国際化という現象があります。それらの交流のうち，公式なものとしては，雑誌や研究グループ，国際会議での交流がありますが，公式なルートを経ない交流も数多く存在します。

この20年そこそこの間に，歴史地理学においてローカルからインターナショナルなものまで多様な研究グループが生まれ成長してきました。それらは歴史地理学のみならず，隣接する他の学問分野の研究者も巻き込んできました。

歴史地理学者の国際親善と協力は疑いなく望ましいものですが，それを達成することは，なかなか困難なことでもあります。国際的な学術交流を実りあるものにするためには，研究哲学や方法論，技術についての共通した関心だけでなく，農業移住や地域経済の変容，世界システムの勃興といった，より実際的な課題についての共通した関心が必要でしょう。また，言葉の壁やイデオロギーの問題といった，交流の障害となるようなものもあります。

他の学問分野と同様に，歴史地理学の可能性の射程は，歴史地理学を研究する人たちの交流や接触，討議や議論のいかんによっていると言えます。歴史地理学の研究は，学問領域の拡大によって，より意味のあるものとなるでしょう。

さて，私にとって，資料館で，未刊の古文書をひもとき，その資料の解釈について，議論を戦わせているときほど，楽しいときはありません。

何人かの研究者は，実は彼ら自身のためであるのですが，過去を明らかにすることが歴史家の使命である，と主張することによって，自分の行為を正当化しようとしています。自分の言葉と視点で過去を理解しようとすることは最初の使命です，しかし，別の使命もあります。それは，過去を現在という地点から解釈したり，研究者の世界

だけで通用するようなものとするのではなく，より広く一般社会において通用するような過去を構築する事です。

そして，最後に，歴史地理学を研究し，叙述すること，さらに教えること，それ自体が，必然的に歴史を作る過程そのものでもあるのです。たとえ，それが象牙の塔の内部で行われたことでも，歴史地理学の研究営為そのものが，歴史自身の一部分なのです。また，ある歴史地理学者たちは，彼らの研究を広く社会に知らしめ，専門家と一般の人々との間のずれを修正するという問題があることを認め，対処するでしょう。そして，その仕事がうまく言ったなら，それは立派なことであると言えると思います。

ジャカルタ西郊都市タンゲランの地域構造と変容過程

小長谷　一之（昭和62年卒）

本日は、急速な都市化が進んでおりますジャカルタ西郊のタンゲランという都市の住宅開発のことを調べて参りましたのでご報告したいと思います。

最初になぜアジアの都市に注目するかについて述べさせていただきます。かつては欧米社会の文明の象徴といわれていた大都市の景観が、急速な第三世界の過剰都市化によって第三世界都市においても現在の欧米先進国と同規模のものが出現するようになってきていますが、その場合に欧米先進国の都市が経験している問題と類似の問題が出てくるのか、違った問題が出てくるのか、という点について考えてゆく必要があると思います。

では、ジャカルタの都市構造についてご説明したいと思います。80年代まではジャカルタを中心とするＤＫＩ（ジャカルタ首都特別地区）が首都圏の範囲でしたが、80年代の終わり頃からもはやそれだけでは都市問題･計画をさばくことができないということで、新しい概念が求められるようになってまいりました。それがJabotabek地域（ジャカルタ＋南のボゴール＋西のタンゲラン＋東のブサキ）といわれているもので、ジャカルタと近隣諸県を一緒にしたジャカルタ大都市圏であります。その中でも西に隣接するタンゲランで急速な都市化が進んできております。

これまでの発展途上国都市論では都心部の周辺にかなりの人口を吸収していたSquattering Areaが形成されていることが指摘されています（過剰都市化論の住宅面）。ジャカルタではカンポン（＝村）と呼ばれておりますが、中央政府の側でも外国からの援助によりましてカンポン改良事業（KIP）を行っております。こういう形で一応形式的にはカンポンが首都ジャカルタではかなり改良されてきました。ただし、職場がinformal sectorであるという問題が多くの人々にとってまだ解決しておらず、カンポンが与えられた場合でもそれを売却して他の都市へ行くという問題が発生しております。

さて今日お話をするところでありますが、郊外では中間所得層向けの民間住宅地が急速な勢いで発展しております。誤解を恐れずに申しますと60年代のわが国の郊外にタイムスリップしたような状況が生まれてきております。そうなってくるとグリフィン＝フォードのラテンアメリカ都市についてモデルのような、中心部を取り囲むSquattering Areaの形成という形から変化して、違いはあるにしてもかつての先進国モデルに漸近しているのではないだろうか。そのことを調べてみたいと思いまして、タンゲランに行ってきたわけです。

まず、インドネシアにおける土地取得・開発のプロセスについてお話ししたいと思います。先進国と最も違う部分は、土地所有、開発のプロセスにおいて国家・行政が大きく関わってきているという点です。ディベロッパーは土地を取得して開発するのに非常にたくさんの段階を経なければなりません。まずは自治体や各種の事務所からprincipal licenceというものをもらいます。そして、その次のlocation permission（立地許可）というものが最も重要でかつ事実上意味があるものであります。これはインドネシアの国土庁(BPN)の各地方部局から開発の地域を選定してもらう、あるいはディベロッパーの側から申し出ることもできますが、とにかく都市計画のグランドデザインに合致する用途地域を割り当て、許可をもらう訳です。この許可をもらうこと自体はそれほど難しいことではないのですが、これをもらったら期限1年以内に25%、2年以内にすべての土地を必ず取得するという義務が課せられます。実際にはこれが遅れる場合が多々あります。資金切れや交渉に時間がかかる、投機目的などで期限が切れてしまうことはありますが、会社名を変えたり中央へ圧力を加えるなどの抜け道があります。

次にbuilding certificateを公共事業省(PU)からもらって建築するわけですが、土地の所有は正式にはland certificateをもらうことによって確定します。

ここでもう一つ日本と違います点は、土地の完全の私有権は認められていないことです。基本的には国家あるいは社会の所有となりますが、国土のほとんどを占める個人農家の土地には期限がなく所有権と変わらない訳です。プランテーションなどの商業的利用には35年の土地使用権と20年の延長権が与えられており、都市的土地利用の場合も30年の使用権と20年の延長権が与えられております。

一方、これまでみてきたのは民間のものですが、低所得者向けの公共住宅（ペルムナス）を国が供給しており、タンゲランでもブミカラワチバルという名称の住宅地があります。その価格は、第一期は3500万Rpと明らかに低所得者向けですが、第三期は7000万Rpと高級なものに移ってきておりまして、低価格者向けの住宅の供給という役割はぼやけつつあります。

もう一点ですが、既存の市街地ではない開発のなかった県下に独立のニュータウンとしての大規模開発が発展しております。そのなかでもインドネシア最大のニュータウンがＢＳＤ（Bumi Serpong Damai＝スルポン平安京）であります。なぜＢＳＤができたかというと、ここだけが大規模ゴムプランテーションであり、一気にまとまった土地をとることができたからであります。これは非常に高級なもので2億から3億Rpのものになっておりますが、実際に4割ぐらいは空き家で投機的保有に使われております。

ただしインドネシアはまだましなほうで、30歳前後の中堅公務員が手取りで200万Rp（日本では約20万円）で、さらに50歳前後の公務員の幹部、大学教授で400万Rp（日本では約40万円）でありますが、住宅の価格は4500万から2～3億Rp（日本では4500万から2～3億円と考えると対応）となっております。つまり収入は日本より一桁多いのに対し、価格の桁は日本と同じとなっております。インドネシアでは、20代の後半ぐらいからほとんどの人が持ち家を持つことができます。逆にいいますとこれでわが国の土地住宅問題がいかに失敗しているかが分かっていただけるかと思います。

研究室便り

＜文学部の改組と地理学教室＞

成田孝三

昨年度会報（第6号）でお知らせしましたように平成7年度に学部の改組が行われましたが，それに続いて8年度には懸案であった大学院重点化が実現して，教育・研究の組織が大きく変わりました。その良否は時間をかけて評価されるでありましょうが，とりあえず本会報ではどのように変化したかを，地理学教室を中心としてお知らせしておきます。

まず文学部の全教官が大学院文学研究科に配置換えされ，同時に文学部兼担となりました。大学院には文献文化学，思想文化学，歴史文化学，行動文化学，現代文化学の５専攻がおかれ，行動文化学は，心理学，言語学，社会学，地理学の4つの大講座によって構成されています。地理学大講座は昨年度会報でお知らせしました通り，地理学（成田・石川担当），地域環境学（石原担当）環境動態論（金田担当），の3分野からなっています。ただし学生は大講座に所属しており，分野別に分かれてはおりませんし，演習等も従来同様全教官で行っております。重点化に関連して変わった主要な点は，従来助手に充当していた教官定員部分を教授に振り替え新しい専攻や講座を設けたこと，それに人文科学研究所教官の担当による協力講座が加わったこと，それに対応して文学研究科の入学定員が増え（修士94名・博士55名が修士122名・博士59名となった），できる限り定員確保につとめること，年度毎の指導をきめ細かく行って課程博士の育成に努力すること等であります。ちなみに8年3月には文学研究科から19名，地理学教室からも初めて1名の課程博士が誕生しました。

他方学部のほうは，7年度に従来の4学科（哲学，歴史学，文学，文化行動学）が人文学科に統合されましたが，それは東洋文献文化学，西洋文献文化学，思想文化学，歴史文化学，行動文化学，現代文化学の6つの系に分けられています。さらに8年度からの入学生に対しては，哲学基礎文化学，東洋文化学，西洋文化学，歴史基礎文化学，行動・環境文化学，基礎現代文化学の系区分が適用されます。また，行動文化学系には心理学，言語学，社会学，地理学の4つの専修がおかれています。そして平成7年度の入学生からは，2回生進学時に各系に分属し，3回生進学時に各専修に所属することになります。大学院地理学大講座所属の教官は主として地理学専修の学生の教育を担当します。これに対応させて，本年度から地理学実習と英書講読を2回生履修可能科目としました。

最初にも申しましたようにこうした一連の目まぐるしい改革がより良い成果を生むかどうかは，時間をかけて評価されねばなりませんが，少なくとも大学院重点化の実を上げるためには，内外から広く優秀な学生を集めることが必要です。同窓生諸氏のご協力をお願いする次第です。

＜研究室の動静＞

本年度は17名の３回生と１名の新院生，そして新しい事務の方として須見友美さんを迎えました。簡単に自己紹介してもらいます。

【三回生】

赤松範明

出身は大阪です。趣味は音楽をきくことです。たまに競馬をやります。今年は語学をそろえることを目標にしようと思っていま

す。よろしくお願いします。

朝山博之
兵庫県の灘高校出身で，尼崎市より通学しています。体育会陸上競技部に所属し，主に短距離種目をやっています。関心のある研究分野は，集落の歴史地理です。古い町並みを散策するのが好きなので。

安藤豊

泉谷洋平
一年後には，英独西３言語の文書がスラスラ読めて，パソコンを自在に操れて，複雑な数理モデルも完全に理解できるようになっていたい。けど実際はどうだか。いろいろお世話になります。よろしくお願いします。

伊藤休一
歴史ある京大地理学教室に入れて頂き，恐悦至極で御座います。大阪の辺境，寺内町で少し知られた富田林から参りました。
「鄙」を愛する田舎者ですが，何とぞ宜敷くお願い致します。

井上喜徳
兵庫県の姫路市出身の井上という者です。自分でも何を考えているのかよく分からない変な人間です。ある日突然何をしでかすか分からない不気味な存在ですが突然かみついたりはしないのでよろしくお願いします。

上村謙介
３回生になってやっと学校に来るという習慣がついてきました。今までのようにサークルに行ったり遊びまわったりすることが減るのは残念ですが好きで選んだ専門なので納得のいくまで追求したいと思います。

叶谷房子
サイクリングのサークルに所属しています。峠を登っていく時の空が近づいてくる感じがうれしくて続けてきました。もちろん，自分のペースで進めばこそ，空を見る余裕も生じるのですが。自分のペースって大切ですねェ。

川合大地
奈良県出身で奈良学園卒です。現在は，サイクリング部にいます。実家からの通学は，1日の内４時間も使ってしまい大変つらいです。あまり熱心に勉学するというタイプではないのですが，何かやりたい事をみつけたいです。

河野良平
なんとなく地理を専攻してしまって，先が思いやられます。凝り性な性格ですが，勉強にはあてはまらないようです。サッカーとクラシック音楽をこよなく愛する男としてお見知りおきください。よろしく。

清水究吾
はじめまして。僕は今，ライフル射撃部というところにいて，鉄砲を撃っています。そのためかどうかは分かりませんが，地理については全然勉強していません。こんな僕ですがこれからもよろしくおねがいします。

南部一寿
福井県から来ました。出身高校は藤島高校です。中学の時から始めたサッカーをいまだに飽きもせずにやっています。1，2回のツケがまわってきて，たいへんですが，今年こそはがんばろうと思っています。

平井博之
はじめまして。成田先生のゼミの平井です。サイクリング部の主将をしています。休みになれば自転車に乗って旅に出て，峠を攻めたり山に登ったりしてきて，この２年で２万キロ走りました。テントで寝ること約200日，不勉強な僕ですがよろしくお願いします。

藤川こず恵
福岡県立修猷館高校の出身です。まだ地理学の事は良く分かっていないし，ぼーっとしているので失敗が多いかもしれませんが皆さんどうぞよろしくお願いします。

古野美穂
大阪府出身です。現在部活動はしておりませんが，歩いたり自転車に乗ったり体を動かすことが好きです。地理学で何ができるのか，何に取り組むのかは具体的には決めていません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

山神達也
Ｌ４の自己紹介で公約したとおり準硬式野球部の主将となり，あとは優勝することのみ。野球している時だけは薩摩隼人っぽいが，日頃はおとなしい。音楽はヘヴィメタ系を好むが，なぜか谷村有美や森高千里もけっこう好き。

横山ともみ
私は，広島県のノートルダム清心高校の出身です。ハイマート合唱団に入って歌っています。歌うことと，食べることが大好きです。思ったより忙しくなりそうなので，ちょっとビビッていますが，よろしくお願いします。

【修士課程】
有留　順子
奈良女子大学における４年間の学生生活を終え、今春よりここ京都大学で勉強させて頂くことになりました。一日も早く新しい生活に慣れるように努力していこうと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

【事務】
須見友美
事務を担当しております須見と申します。自宅は、滋賀の大津です。近くには、瀬田の唐橋や、石山寺があり環境は最高です。週３日は事務に専念し、週末はテニスで汗を流したいと思っています。宜しくお願い致します。

また，昨年度の学部卒業生，大学院生の就職先，進学先は以下の通りです。

＜学部卒業者＞

足立理	大学院文学研究科
岩田憲司	伊藤忠商事
遠藤元	ＪＲ貨物
柴田聖子	ジャストシステム
島崎郁司	大学院文学研究科
曽田菜穂美	東南ｱｼﾞｱ研究ｾﾝﾀｰ研究生
津田朋一	三和銀行
平井素子	積水化学
松島文子	大学院人間・環境学研究科
山村亜希	大学院文学研究科
渡辺純	東京書籍

＜修士課程修了者＞

中藤容子	滋賀県立琵琶湖博物館

＜院生の研究状況の報告＞

昨年度の石川先生の提起を受けて，今回から院生の研究状況をお知らせすることになりました。

PD1.滝波章弘

現代南仏丘上集落のルネッサンスーバスプロバンスのセヨンの例ー.史林76-5.751-775(1993)

ツーリズム空間の同心円性と関係距離の抽出ー横浜市立小学校家庭の家族旅行のデータからー.人文地理46-2.121-143(1994)

ギド・ブルーにみるパリのツーリズム空間記述ー雰囲気とモニュメントの対比ー.地理学評論68-3.145-167(1995)

プレッドの行動行列によるツーリスト行動の分析.地理学評論69.未定(1996)

作文に表現される子供の世界ー旅行世界と日常世界の違いー.人文地理48.未定(1996)

D3.AVILA-TAPIES Rosalia

Nueva perspectiva de las migraciones interiores españolas.en Anales de Geografia de la Univ. Complutense.No.13.111-126(1993)

在日外国人と日本人の人口移動パターンの比較分析ー大阪市生野区を事例としてー.人文地理47-2.62-76(1995)

D2.米家泰作

吉野山村における近世前期の耕地経営ー川上郷井戸村を事例としてー.史林77-1.116-134(1994)

中世山村の境界と山地地形ー土佐国大忍荘槇山の名領域ー.人文地理48-1.48-68(1996)

D2.佐藤廉也

焼畑農耕システムにおける労働の季節配分と多様化戦略.人文地理47-6.21-41(1995)

D1.堀健彦

八・九世紀伊勢神郡の再編成過程と領域性ーその歴史地理学的試論ー.史林78-1.97-137(1995)

M2.今里悟之

村落の宗教景観要素と社会構造ー滋賀県朽木村麻生を事例としてー.人文地理47-5.42-64(1995)

M2.門井直哉

長門国府周辺施設の歴史地理学的考察.史林79-2.135-150(1996)

M2.祖田亮次

輪島市海士町の漁民集団ーその特質と持続性の背景ー.人文地理48-2.未定(1996)

＜１９９６年度講義題目＞

＊講義＊

教授	成田孝三	地理学講義Ⅰ
〃	石原　潤	地理学講義Ⅱ

＊特殊講義＊

教授	石原　潤	現代中国の地域研究
助教授	石川義孝	先進世界におけるわが国の人口移動
人環研教授	足利健亮	歴史地理学における資料批判
〃	金坂清則	地理学における「地域」
総人教授	山田　誠	日本近世都市の地理的諸相
理学部教授	岡田篤正	自然地理学

講師	松本博之	文化地理学の諸問題
〃	高橋誠一	古代日本の都市とその周辺
〃	高阪宏行	地理情報システムの基礎
〃	吉田伸之	日本近世都市社会史論

＊演習Ⅰ＊

教授	成田孝三	地理学研究法Ⅰ
〃	石原　潤	地理学研究法Ⅱ
助教授	石川義孝	地理学研究法Ⅲ

＊演習Ⅱ＊

教授	成田孝三	人文地理学の諸問題
〃	石原　潤	
助教授	石川義孝	

＊講読＊

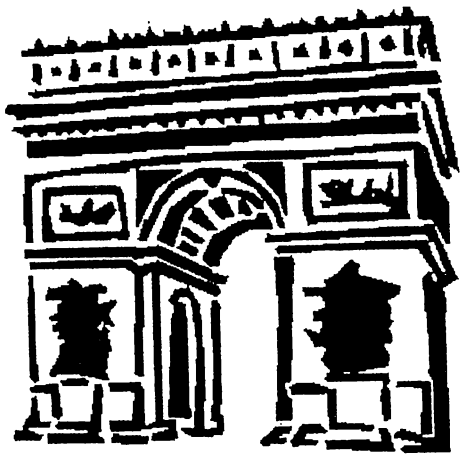
教授	成田孝三	英語地理書講読
講師	高橋　正	フランス地理書講読
人環研助手	豊田哲也	ドイツ地理書講読
人文研助手	石川偵浩	中国書講読

＊実習＊

助教授	石川義孝	地理学実習
講師	森　三紀	

＊大学院演習＊

教授	成田孝三	地域の諸問題
〃	石原　潤	
助教授	石川義孝	



事務局から

＜地理学談話会１９９５年度会計報告＞
(1995年4月~1996年3月)

【資金会計】　(単位：円)

収入	年会費	315,542
	繰越金	409,749
	計	725,291
支出	運営への振替	433,129
	次年度への繰越	292,162
	計	725,291

【運営費会計】

収入	資金会計からの振替	433,129
	秋期懇親会会費	214,000
	春期懇親会会費	134,500
	計	781,629
支出	秋期懇親会経費	209,900
	論文発表会経費	179,475
	名簿印刷費	155,000
	会報等印刷費	41,910
	通信・文具等	180,743
	弔電	14,601
	計	781,629

＜訃報＞

元地理学教室主任教授で本学名誉教授の水津一朗先生が，4月8日逝去されました。享年73。

先生は，昭和21年京都帝国大学文学部を卒業，大阪市立大学法文学部講師，文学部助教授を経て，昭和34年4月京都大学文学部助教授に就任，同46年教授に昇任，地理学講座を担当されました。昭和63年定年によ

り退官され，名誉教授の称号を受けられました。その間，昭和55年1月から58年1月まで文学部長として大学行政に尽力されました。退官後は，63年3月まで奈良大学文学部教授，同年4月から平成6年3月まで同大学学長を務められました。

先生の研究は，社会地理学，歴史地理学，地理学史，位相地理学の諸分野に及んでおり，近代地理学を確立したドイツ地理学を基礎として，景観論と機能論を総合した地域論を展開され，また古典的な地理学と20世紀後半に台頭した計量地理学の止揚をめざした位相地理学を提唱されました。主な著書に『社会地理学の基礎問題』，『社会集団の生活空間』，『ヨーロッパ村落研究』，『地域の論理』，『近代地理学の開拓者たち』，『地域の構造』などがあります。

学界においては，昭和51年11月から55年10月までと59年11月から61年10月まで通算3期にわたって，人文地理学会会長を務められたほか，昭和60年には史学研究会理事長と日本学術会議会員にも選ばれ，学界の発展に貢献されました。それらの功績により勲二等が授与されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。（成田孝三）

前回の「会報」発行以降、水津先生の他，次の方が亡くなられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

確認分、括弧内の数字は卒業年、敬称略。

平川孝義　(S25)

＜お知らせ＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局までご一報下さい。（数字は卒業年、敬称略）

池内麟太郎(S48)
石角　強　(S45)
生田　博文(S51)
今井　平八(S19)
遠藤　正雄(S53)
岩部　敏夫(H３)
岡本　靖一(S42)
小口　稔　(H３)
加藤　典嗣(S63)
児玉高太郎(H２)
新谷　泰久(H２)
鈴木　伸国(S63)
田島　渡　(S23)
都子　后　(S15)
出原　遵乗(S34)
西沢　仁晴(S49)
野田　茂夫(S36)
林　　洋子(S40)
福田　新一(S46)
堀　　正　(S62)
松本　弘史(S58)
山下　和久(S57)
山田(児玉)憲子(S45)

【編集後記】

会報の発行が遅れまして申し訳ございません。しかし，大学改革の影響を受けてか，内容は盛りだくさんになっているのではないでしょうか。寄稿して下さった方，紹介を書いて下さった方ありがとうございました。

編集　須見　友美
　　堀　健彦
　　水野　真彦

発行日　1996年6月10日
発行者　地理学談話会
〒606 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
TEL　075-753-2793